

「自我のための退行」と創造性・適応との関わりについて

——「自我のための退行」の測定とその実証的研究——

伊 藤 俊 樹

Relationship between Regression in the Service of the Ego, Adaptation and Creativity

ИТОH Toshiki

1 初めに

芸術家の創造の秘密を解明しようと、今までに多くの研究が成されている。心理学の分野でも、芸術創造は大きなテーマの1つである。作家の病跡学的研究や、作品の表現病理学的研究など、いろいろな側面から様々なアプローチが試みられているが、なかでも、精神分析学の分野で、Kris (1952) によって唱えられた。「自我による自我のための退行 (Regression in the service of the ego)」という概念は、芸術家の精神力動を解明するひとつの鍵として、たびたび用いられてきた。そして、この「自我のための退行」は、単に芸術家の創造のプロセスを説明するだけでなく、一般の人々の創造性や適応的な在り方にも、大きく関与していることが分かってきた。本論文では、「自我のための退行」の概念の変遷を辿り、「自我のための退行」を実証的に研究する流れをふりかえり、「自我のための退行」と創造性、適応との関わりを探っていきたいと思う。

2 「自我のための退行」という概念について

Freud, S は、「精神分析入門」(1914-17) の中で、芸術家の精神力動のあり方に触れ、次のように述べている。「芸術家は、あまりにも強い本能的欲求に駆り立てられるのであるが、これらを満足させ得る現実的手段が欠けている。そこで芸術家は、現実を見捨ててその関心のすべてを空想生活の願望形成に転移する。ひょっとするとこの道は神経症に通じているかもしれない。……芸術家たちの、神経症による己が才能の部分障害に、いかに著しいものがあるかは、周知のごとくである。……おそらく彼等の体質は、昇華への強い能力と、葛藤を決定する抑圧の一定の弱さ (Lockerheit) とを含んでいる。ところが芸術家は、このような空想の願望形成から現実へ復帰する道を有している。」(下線筆者)。Freud は、芸術家の抑圧の弱さを、神経症者と共通の特徴として述べ、自我の弱さの表れとしてみている。英訳では、この Lockerheit が flexibility——柔軟性という言葉に置き換えられているが、Kris, E (1952) は、この抑圧の柔軟性という概念を積極的にとりあげ、創造的な、自我の強さを示すあり方としてとらえ直した。そ

して、この抑圧の柔軟性が条件となって二次過程から一次過程への「自我のための退行 (regression in the service of the ego : 以下 RISE と略)」が生じるとした。つまり、Kris は芸術家の心理を、その葛藤のパターンに結び付けるのではなく、構造的な問題に焦点を合わせることによって、創造性への新しいアプローチを見出したのである。ここで言う一次過程、二次過程とは、Freud が「夢判断」(1900) 第 7 章で展開している概念だが、一次過程は「無意識的なイドにおける現象を支配している過程」で、本能衝動に密接に関連した原始的な不合理な思考であり、置き換え、凝縮、象徴的表現などの機制に従う。また、二次過程は「前意識、自我における現象を支配している過程」であり、衝動エネルギーの制御と拘束が行われる。覚醒思考、注意、判断、推論、といった現実に即した論理的な心理機能は、この二次過程に属する。発達的にみると、心理的機能は一次的過程から二次過程へと発達するが、その方向は非可逆的なものではなく、その時その両過程のあり方によって、一方が他方を支配することになる。そして、一次過程が支配的になる状態を退行と呼ぶ。そもそも退行という概念は病因的な機制の意味で用いられ、否定的なニュアンスを持つ言葉として使われてきた。退行をどう意味づけるかは、原始的なもの、幼兒的なもの、生物的なものを肯定的にとらえるか否定的にとらえるかによって、大きく異なってくる。Kris (1952) は、その著 “Psychoanalytic Exploration in Art” の中で、『退行に圧倒された自我と、「自我による自我のための退行」との対比』について次のように書いている。「自我退行は自我が弱い場合——睡眠中、入眠中、幻想、酩酊時、精神病の場合——にのみ起こるのではなく、さまざまな型の創作過程でも起こる。自我は一次過程を利用する場合もあり、必ずしも一次過程に征服されてばかりいるわけではない。……一定の条件下では、自我は退行を調整する。また、自我の統合機能には、後にもっとよい統制を取り戻すために、随意的・一時的にある領域から備給を撤回する機能も含まれている。」「それは美的表現一般の広い領域にわたっており、さらに芸術や象徴形成に関するあらゆる領域、つまり、宗教的儀式に始まって、全人間生活におよぶ、前意識や無意識の領域に適用される。」このように Kris は、自我の統制下にある一次過程への退行という概念を創出し、退行の持つ創造的な側面に始めて目を向けたのであった。彼は更に、芸術的創作に於ける退行過程の、二つの重要な段階——靈感的な段階 (inspirational phase) と推敲の段階 (elaborational phase) ——に注目した。靈感的な段階では、「エス衝動やそれに近い派生物が受け入れられ易いことが特徴となっている。」推敲の段階では「逆備給による防壁が再び強化され……備給は他の自我機能へ、つまり現実検討や公式化……へと向かう。」そして Kris は、この二つの段階は、敏速に交替することもあれば、長時間にわたることもあり、この交替が随意的に行われる、という意味で、自我が退行を統制している、と考えた。そして、「もし自我が、時により目的によってはエスの機制を許容できるとすれば、それは自我の強さの指標と考えられる。」と、RISE の背後には、それを受け入れる強い自我の存在があることを示唆してしいる。

Kris の退行理論を更に精緻化したのが Schafer, R (1958) であり、彼は、RISE を次のように定義した。「一次過程やその派生物が、意識的経験の中にある場所を与えられている限りにおいて、それを退行と呼び、その退行が自我の興味 (創造的・共感的な) のために役立つ、比較的簡単に立ち戻ることができ、適応的な退行という観点から、生産的な仕事へと従う場合を、“自我のための” と呼ぶ。」この定義からも分かるように、Schafer は、創作過程の説明として用いられた RISE を、より広い適応的なプロセス全般に働く、適応的な創造的退行にとらえ直したのであった。

彼は更に、「自我のための退行は、適応を促進するために心的機能のレベルを部分的・一時的にコントロールされた形で低めることである。……それは個人の前意識、無意識の素材へ徹底的な性欲化や攻撃化なしに近づき、従って崩壊をもたらすような不安や罪悪感なしに近づくことを意味する。……そのプロセスは、他の……自我機能をとめておくかもしれないような、自我の中心的なコントロール機能を含んでいる。」と述べ、自我のための退行の際には、一時的部分的に自我機能の停止が伴うことを示唆した。

更に彼は、RISE を促進する条件として、1) 自分の情動にふれていると感じるときに、比較的安心していただけること。2) 自我の安心感と自我の同一性。3) 外傷がないことではなく、それに対して支配性を持つこと。4) 超自我の比較的寛大さと、防衛とコントロールの柔軟性。5) 早期の母子間の信頼関係。6) 自我のための退行というプロセスが、より大きな共同体にとって意味あるものとされること。という6つの条件（注1）をあげた。ただし、Schafer 自身、この条件は芸術的科学的創造過程の退行よりも、直接的な人間間の関係に含まれる適応的退行のほうにより関係していると述べている。

Schafer の業績は、以上のように理論化された自我のための退行を、ロールシャッハテストのテスト過程と結び付けて、投影法を用いて、自我のための退行を測定する道を開いたことにある。「TAT やロ・テストは、より自我のための退行を必要とし、より一次過程に近づきそれを使うことを必要とする。……このテストに於いて被験者は、芸術家と同じように自らのうちに経験の諸形式をみつけ、反応を精練させる内容を見つけねばならない。広範囲の形式と内容に自由に近づくには自我のための退行が必要だが、退行が行き過ぎ、自我への奉仕からはずれると、反応は流動的で拡張しすぎたものとなり、太古的な性質を帯びる。」と、ロ・テストの反応に、被験者の退行のあり方が反映されるとした。一次過程への退行の測定については3で触れることにして、次に Bellak について述べることにしよう。Bellak (1973) は、彼が考え出した人格評価の Method、「面接による自我機能の臨床的評価法」の自我機能の一つに、「自我のための適応的退行 (adaptive regression in the service of the ego : 以下 ARISE と略)」を含め、自我のための退行が、自我機能の一つであることを明確にした。彼は、ARISE の二つの要因として、A. 自我の振動機能と B. 新しい布置への統合を挙げ、A については、「自我が前意識的、無意識的内容に対する意識性を高めながら、自我の知覚的、概念的鋭敏さを緩められる程度」が関わり、B については、「新奇な布置状態を導入するのに、一次過程の思考を自我で統制しながら用い得る程度。退行を究極的に統制し、二次過程によって利用することで生み出される、創造的統合の結果として潜在的な適応力が増大する程度」が関わる、とした。

彼は、自我のための退行のプロセスを、「退行と vigilance (覚醒) の間の素早い振動の中で、創造的所産の適応的な性質が現れて、統合される」と描写し、他の自我機能、とくに統合機能のために、ある自我機能（認知的、選択的、適応的機能）を相対的にひっこめることが振動機能であるととした。それによって、図と地の境界や、論理、時間、空間、他の諸関係の境界がゆるみ、その結果新たな境界を持ったあらたな布置が生じるとした。つまり、Bellak は Kris が述べた霊感的な段階と、推敲の段階との間の交替振動という概念に、より一般的な意味を与え、更に Schafer のいう部分的退行を、個人の自我機能の相対的な縮小 (reduction) ととらえ、その意味をより明確にしたのだった。

以上のように Kris によって提出された、芸術創作に於ける、自我のための退行の概念は、次第により広い意味での創造性や適応との関わりの中でとらえるようになり、「適応的退行 (adaptive regression)」とも呼ばれるようになっていく。Rosegrant (1980) は、やや広くなってきたこの概念を整理する意味で、public と 2 種の適応的退行について述べている。public とは、退行の結果の産物が最終的に、他者とのコミュニケーションという形をとるもので、芸術的創作、心理療法の過程などを含み、private とは、個人の精神内部での利益のためになされるもので、催眠や宗教的体験、至高体験などである。勿論この二つははっきりと分けられるものではないかもしれないが、退行の目的によって RISE を区別するという視点は重要なものと思われる。

3 RISE の測定方法について

以上のように理論化されてきた RISE であるが、その RISE へ実証的な研究の道を開いたのは、先にも述べた Schafer である。Schafer は、ロールシャッハテストの解釈に RISE の概念を適用することによって、投影法を用いての RISE の測定に理論的基礎を与えた。

そして、RISE を二次過程から一次過程への退行と考える立場から、ロールシャッハ反応の独自のスコアリング方法を考え出したのが、Holt & Havel (1961) である。彼等は、Freud の一次過程、二次過程を測定するカテゴリーを考案する上で、1) 内容、2) 形式、3) 一次過程に加えられるコントロール、の 3 つを強調した。1) については、一次過程に近いほど、思考内容は動因によって強制され、組織化される。従ってその動因が中和されていないほど精神過程は一次過程よりだと考えられるとし、2) については「ロ・テストに表れる一次過程は、夢と同じように、凝縮、置き換え、象徴化として生じるはずだが、分かりにくい。一次過程の跡を消し損ねることが手掛かりになる。ロ反応は一次過程の要素を含んでおり、問題はテスト状況で被験者が自らに許している一次過程の量なのである。その際、二次過程を特徴付ける、現実との経験に根ざした秩序だった論理的思考と、どれだけ離れているかを測定することが大事になる。」

(1956) と述べている。退行が、自我のための適応的なものになるためには、3) のコントロールという要因が大事になってくるが、Holt (1956) によれば、同じ反応でも主観的には異なっており、不快を感じる被験者も、快を感じる被験者もあり、それぞれコントロールの程度が異なっている。一次過程、二次過程の評価をする時には、被験者の反応に対する態度と、思考に含まれる一次過程に、支配される程度或いはそれを支配する程度を問題にしなければならない。すべての反応はコントロールの種類とコントロールの不在に関しても考察ができる、とした。以上の 3 点をふまえた上で Holt & Havel は、1) 内容面の一次過程と二次過程、2) 形式面での一次過程と二次過程、3) コントロールと防衛、の三種のカテゴリーを設けスコアリングの基準を作り上げた。

内容面のカテゴリー (表 1 参照) は、そこに表されている衝動に応じて①性的目標をもったもの、②攻撃的目標をもったもの、③罪・不安を表現しているもの、の 3 つに分類され、そこで衝動が生そのまま出されるか、修正された形で出されるかによって、level 1、level 2 の段階をつけた。level 1 は一次過程により密接につながり、ここでは衝動がコントロールされずに表出されていたり、衝動に関してより直接的な表現がなされている。level 2 は、より二次過程に密接につながり、衝動は社会化され、受け入れられるものとなっている。③の罪と不安の表現は①②

伊藤：「自我のための退行」と創造性・適応との関わりについて

とは若干異なり、性的・攻撃的衝動が顕在化するかもしれないという、言語化されない脅威をほめかす不安を扱う。

表1 内容面に於ける一次過程的反応・二次過程的反応のスコアリング基準
1は一次過程的反応を、2は二次過程的反応を示す。

<p>■性的目標を持った衝動</p> <p>[L1O (口唇愛的)] …口、唇、舌、乳(以上のものが独立して見られた時)「おっぱいを飲んでる動物」</p> <p>[L1A (肛門愛的)] …糞便、排泄器官、排泄についての言及。</p> <p>[L1S (性器愛的)] …男根、女性器への直接的言及。</p> <p>[L1E-V (露出的・窺視的)] …特に裸体に言及された時。</p> <p>[L1H (性についての曖昧さ)] …性の曖昧さ。</p> <p>[L1M (その他)] …月経、小便、誕生。</p> <p>[L2O (口唇愛的)] …口、唇、舌など(人間、動物の部分として見られた時。)、飲食、食べ物など。「ガムを噛んでいる人」</p> <p>[L2A (肛門愛的)] …尻や肛門が人間や動物の部分として見られた時。後ろ姿。泥やごみ。「泥の中の虫」</p> <p>[L2S (性器愛的)] …社会化された性や性的接触への言及。「手を取り合って立っている花嫁花婿」</p> <p>[L2F-V (露出的・窺視的)] …衣服の隠すという機能への言及。仮面</p> <p>[L2H (性についての曖昧さ)] …ある人物に属するとされる性別が、普通の反応とは逆になっている場合。</p> <p>[L2H (その他)] …性的な解剖概念。「子宮」「胎児」</p> <p>■攻撃的な目標を持った衝動</p> <p>[Ag1P-S (潜在的-主体)] …サディスティックなヴィヴィッドなファンタジー、「刺きだしの牙」</p> <p>[Ag1P-O (潜在的-対象)] …サディスティックなヴィヴィッドなファンタジー、「怯えた人-悪夢のような」</p> <p>[Ag1A-S (能動的-主体)] …対象の原始的な絶滅。「女性をばらばらにしている魔女」</p> <p>[Ag1A-O (能動的-対象)] …対象の原始的な絶滅。「ペニスを貫く鋭い器具」「横顔、打ち砕かれた口」</p> <p>[Ag1R (結果)] …サディスティックな暴力的な活動の結果や、切断された人や動物。</p> <p>[Ag2P-S (潜在的-主体)] …人を脅かすか、潜在的に危険な人や動物、物体、幽霊、魔女、巨人、ドラゴン、怪物など。</p> <p>[Ag2P-O (潜在的-対象)] …脅かされた人や動物。</p> <p>[Ag2A-S (能動的-主体)] …“戦っている”反応。爆発、噴火。</p> <p>[Ag2A-O (能動的-対象)] …Ag2A-Sの犠牲者。「不幸な人-どなりつけられている。」</p> <p>[Ag2R (結果)] …血。傷ついた人や動物。壊れた物体。</p> <p>■罪と不安および情動の表出</p> <p>[Anx 1] …悪夢の世界に属するもの。「3つの頭、この裂け目に落ちるんじゃないかと恐れている。」</p> <p>[Anx 2] …不安定なバランス状態にある人や物。悪魔。サタン。</p>

又、形式面のカテゴリーは、凝縮 (condensation)、色彩と形態の独断的結合、抽象的なものの視覚的表示、矛盾 (contradiction)、逸脱した言語化 (deviant verbalization)、自閉的な明細化 (autistic elaboration)、その他、の7つにわかれ、それぞれにサブカテゴリーがあり、level1、level2の段階がつけられている。(表2参照)

RISEの測定法は、大きく、投影法と質問紙法の2つに分けられ、口・テスト以外の投影法として、TATが用いられる場合もあるが、このHoltらのスコアリングシステムが一番良く使われており、構成概念の妥当性も検討されている。(Pine & Holt 1960, Cohen 1960, Dudek 1968, Wagner 1971, Rosegrant 1980など)

表2 形式面に於ける一次過程的反応・二次過程的反応のスコアリング基準
1は一次過程的反応を、2は二次過程的反応を示す。

<p>■凝縮 Condensation (イメージの融合)</p> <p>[cf-p 1 (二つの別々の知覚の融合)] …「女を餌にして誘惑している蝙蝠を象徴している。(カード5)」</p> <p>[ci-e 1 (ものが内側と外側と同時に見えること)] …現実的には不可能な仕方、人物に内側と外側の身体部分が指摘される。「間に蝶結びのリボン。これは肺かも。」(カード3)</p> <p>[cp-f 1 (二つの知覚的部分的融合)] …二つの知覚が同じ場所に見られて、どちらか決められない。意味の同時性という点が重要。</p> <p>[cu-p 1 (手放すことのできない知覚)] …「Xに見えるけど本当はY。」</p> <p>[C-co 1 (合成)] …2つ以上の知覚の部分が結び付けられて、新しい混合された創造物を作り出す。その合成されたイメージが文化的な現実中存在しない場合。「蝙蝠の翼を持った兎。」(カード5)</p> <p>[C-co 2 (合成)] …神話や芸術の中に現実に存在する合成イメージ。「イカロス」</p> <p>[Ca-12 (2つの知覚の独断的な連結)] …①2つの明白なものが、物理的に独断的なやり方で結び付けられている。「くっついた女性達」②1つのかんまりははっきりした知覚を、隣接する部分から切り離すことが難しい。「何か飛ぶ動物。この塊に引き止められている。」(カード6)</p> <p>[Ca-c 2 (別々の知覚の独断的結合)] …2つの別々ではあるが隣接する知覚が、現実性を侵害する関係や意味付けで置かれる場合。</p> <p>[Caci 2 (不可能な結合)] …①大きさのくい違い。「巣におんぶしようとする鼠」②現実には一緒に生じないものを一緒にすることから生じる反応。「口で橋を支えている2匹の動物。」③自然と超自然の参照枠を混ぜてしまう反応。</p> <p>[Ca-cu 2 (ありそうにない結合)] …道理には適っているが、比率が合わない結合反応。「水晶球を見詰める魔女」</p>
<p>■色彩と形態の独断的結合 Arbitrary combinations of color and form</p> <p>[FCarb 1 (色彩と形態の独断的結合。定形)] …「赤い熊」</p> <p>[CFarb 1 (色彩と形態の独断的結合。不定形)] …「緑の雲」</p> <p>[FC 2 (色彩と形態の独断的結合。)] …描写された知覚に不自然な色彩について言及する場合。「夕日を浴びて赤い。」</p>
<p>■抽象的なものの視覚的表示 Visual representation of the abstract</p> <p>[C-sym 1 (抽象概念を示すのに、色彩や濃淡を特異的に使う)] …「赤は私に売春を思い起こさせる。」</p> <p>[S-sym 1 (抽象概念を示すのに、空間関係を使う)] …「この上の赤の所は、互いに伝えたい思い。」</p> <p>[I-sym 1 (抽象概念を示すのに、特異的な具体的イメージを使う)] …「赤い蝶ネクタイが陽気さを示す。」</p> <p>[C-sym 2 (抽象概念を示すのに、色彩や濃淡を使う。)] …文化的に共有できるステレオタイプな色の意味。「この赤のために暴力を感じる。」</p> <p>[I-sym 2 (抽象概念を示すのに、伝統的なイメージシンボルを使う)] …「爆発…怒りを表しているのだろう」</p>
<p>■矛盾 Contediction</p> <p>[CtrA 1 (感情面での矛盾)] …「カード全体にとっても美しいものがある。いやな感じのものは何もない。…最初の印象は、汚い。蜘蛛か血。それだけはちょっと不快なものね。その色が汚い感じ。」</p> <p>[CtrL 1 (論理的な矛盾)] …与えられた知覚に不適當、両立しない性質。「オールドミス。でも、とても若く見える。」</p> <p>[CtrIn 2 (不適當な活動)] …見られた人、動物、物が、それに不適當な活動をしている場合。「空中を飛んでいる人」</p> <p>[VS 2 (言い間違い)] …言葉の言い間違い。</p> <p>[VP 2 (奇異な言語化)] …奇妙に思われるくらい、自閉的で慣用からはずれた言葉の使用。「素敵な犬。犬の中でも一番高貴な。」</p>
<p>■自閉的な明細化 Autistic elaboration</p> <p>[AuEL 1 (自閉的な明細化)] …奇怪で非現実的な仕方、明細化を行うとき。「…ロシアの熊で、手に赤いしるしが…楽しく追いかけてっこをしていて、アメリカでも皆同じ事をしているんだろう。何か来るべきことへの陽気なダンス。」</p> <p>[S-R 1 (自己関与的表現)] …テストや見たものが、非現実的・魔術的な仕方、自分個人と関わっていると感じる場合。「これは私の家族です。」</p> <p>[AuEL12 (自閉的な明細化)] …奇怪で非現実的、あるいは逸脱した仕方、明細化を行うが、AuEL 1ほど極端ではない。「2人のパニー。互いを見ている。互いに気づいて頭から爪先まで眺めている。あなた誰?と言っているよう。相手はどこから来たのかしらと思いつつ、大急ぎで自分の事に戻っていく。」</p>

■その他

[Trans 1 (知覚の流動的変容)] …自分の目の前で、あるものが別のものへと変容していく。

[ML 1 (記憶の概念的体制化の緩み)] …誤って、ある概念を概念的に関係があるが同一ではないものと同じであるとする。[「こうもり、羽のある鳥ですね。僕はこうもりは嫌いです。」]

[DW 1] …小さな部分をもとに、より大きな統一へと広げて行く反応。

[I-Msc 1 (その他)] …色に対して、他の感覚モダリティであるかのように反応する。「青が木の匂いを思いださせる。」

[Do 2 (断片化)] …普通多くの人が全体を見るところに、部分しか見られない時。

[Imp 2 (印象的な反応)] …反応に際してよく使われる所の一部しか使わずに、印象上の反応が「感じ」として与えられる。「水平線。深さの感じ。」

[F-Msc 2 (その他)] …色彩を無彩色プロットに投影する。

質問紙としてよく使われるのは、As, O'Har & Munger (1962) によって作製された Experience Inventory (以後 EI と略) である。EI は、日常生活に於ける類催眠現象を量的に把握することを目標として作られており、サブカテゴリーとして A 意識の変性状態、B 論理的矛盾に対する耐性、C 役割演技、D 分離、E 自我の放棄、F 退行への耐性、G 退行の利用、H 至高体験、I 基本的信頼感、の 9 つがある。又、類似の質問紙として、斎藤 (1981) の変性意識状態検査質問紙 (ASC) がある。ASC とは斎藤によれば、人為的、自発的を問わず、正常覚醒状態にいる時と比較して、心理的機能や主観的経験に於ける著しい異常性や変容を特徴とし、それを体験者自身が主観的に認知可能な意識状態である。それを日常的にどの程度体験しているかを測定するのが、ASC 検査である。下位カテゴリーとして、現実志向のための行動体系の放棄を示す、1) 空間感覚の喪失、2) 時間感覚の喪失、3) 主観-客観の差の感覚の喪失、4) 言語感の喪失、5) 自己感覚の喪失、の 5 つと、変性意識状態の特徴を示す 6) 恍惚感、7) 注意集中、8) 宇宙識、9) 受動性、10) 一時性の 5 つのカテゴリーがある。変性意識状態は、1) ~ 5) の現実志向体系の機能低下や放棄の結果であり、それは Freud の言う二次過程からの徹退を意味すると考えられる。従って、斎藤自身は退行という概念を用いていないが、変性意識状態に入り込むということは、二次過程から一次過程へ退行することだと考えることができるだろう。その他には、言語連想や、Object Sorting Test, Dream Report の分析、面接法として Bellak (1973) の適応的退行に関する質問などがある。

4 RISE と、創造性、適応との関係に関する研究

先にも述べたように、「自我のための退行」は現在、より広い意味での創造性や適応との関わりの中でとらえられるようになってきている。RISE と創造性、適応との関係についての実証的な研究は、大きく 3 つに分けられる。即ち芸術家 (美大生も含む) を被験者とした研究と一般人を被験者とした研究、子供を被験者とした研究である。

まず、芸術家を用いた研究を概観してみる。Cohen (1960) は、ロ・テストを用いて創造的な美大生と一般的な美大生 (創造的であるかどうかは、指導教官に判定してもらった。) を被験者として実験を行った。ロ・テストの反応は、Holt のシステムを用いて分析を行った。結果は、一次過程の反応の反応%は両群で変わらなかった。又、一次過程の反応以外では形態水準に両群で差がなかったのに対し、一次過程の反応では創造的な群の方が高かった。その結果から、Cohen

は、芸術家の創造性を規定するのは、一次過程の量ではなく、それに加えられるコントロールの程度だと結論づけた。Wild (1965) は、言語連想と Object Sorting Test を用いて、美大生、教師、分裂病者を対象にして実験を行い、美大生はより退行した条件で多くの独創的反応を出し、それを好むという結果が出た。Dudek (1968) は、成功している芸術家、成功していない芸術家、M の多い一般人を被験者とした。成功している画家のほうが、成功していない画家より一次過程の量が多かった、と Cohen とは異なる結果を報告している。又、芸術家群は一般群より一次過程の量が多く、一般群はその反応に圧倒されるのに対し芸術家群はそうでない、という結果が出た。斎藤 (1981) は ASC を、美大、音大、一般大学の学部生におこない、美大の学生が ASC 得点が高かったと報告している。伊藤 (1990) は美大院生と一般大学生に ASC とロ・テストを行った。結果は、美大院生の方が ASC 得点が高く、一次過程の量も多かった。コントロールは差がなかったが、良好であった。特に、美大院生は、内容面ではプリミティブな性的衝動への退行が特徴的で、退行が形態水準の引上げという生産的な結果をもたらしていることが示唆された。また、形式面では、画家としての物の見方に関わるカテゴリーでの退行が特徴的であることが分かった。以上のように、芸術家を用いた研究では、芸術家は一般人と比べて、一次過程の量が多く退行しやすいという共通した結果が出ている。しかし、芸術家内での比較に関しては、彼等の創造性を規定するのは、一次過程の量であるとする結果と一次過程に加えられるコントロールであるとする結果とが出ているようである。

一般人を被験者とした研究では、Myden (1956) が創造的な群とそうでない群を被験者にし、前者で一次過程の量が多かったという結果を得ている。Pine & Holt (1960) は、種々の創造性テストとロ・テストを用いて、一次過程の量とコントロールの相関をみた。男性では、約半数のテストでコントロールと有意な相関があったが、女性群ではないという結果が出た。また一次過程の量では女性が2つのテストで有意な相関を示し、男性ではまったく相関を示さないという結果になった。Pine & Holt は、男性と女性でテストに対する構えが違うこと、テストによって、要求するもの (control か expressiveness か) が違うのがこの結果の理由ではないかとしている。Fitzgerald (1966) は、EI と MMPI、言語連想、Object Sorting Test を用いた。EI の high 群は、MMPI の R (抑圧) の指標が低く、適応的退行と抑圧の低さとの関係を確認した。又、high 群は言語連想、Object Sorting Test でより退行的な条件で、多くの独創的な反応を出すことを確認した。Wagner (1971) は inkblot test と Dream Report、EI を用い、inkblot test と Dream Report を Holt のシステムに従って分析した。EI の high 群は、inkblot test、Dream Report でより多くの一次過程を報告し Holt の system の妥当性が検証された。井上 (1972) は、正常群、神経症群、分裂病群で、ロ・テストを用い、Holt のシステムに従って分析し、比較を行った。正常群・分裂病群は、神経症群より、一次過程が多く、正常群は分裂病群よりコントロール (形態水準) がよく、反応を受容しており、成熟した成人は適応的な退行を行うということを支持する結果を報告している。Kalsched (1972) は、EI と Dream Report を用い、Holt のシステムに従って分析した。EI の high 群は、夢の形式的側面で、より奇怪で非論理的であり、high 群の方がかなり強い不安を一次過程的側面に対して示したが、そのような不安にも彼等は耐えられると報告している。Loshak & Renznikoff (1976) の研究は、EI と2種の創造性テストを用いている。この研究は、EI と創造性テストで正の相関があったことを示している。Rosegrant (1980) は、Holt の system

を用いて、EI、美的感受性テストなど4種のテストとの相関を求めた。EIと一次過程の量とで相関はあったが、コントロールとは関係なかった。美的感受性は一次過程の量とは関係なく、コントロールと相関があるという結果が出た。

以上のように一般人を被験者とした研究では、適応的退行と創造性との関係が確認されているが、芸術家の場合と同じ様に、一次過程の量がより創造性に関わっているのか、一次過程に加えられるコントロールの方が創造性を規定するのかが議論が分かれている。

子供を使った研究では、適応的退行と創造性の関係について、相反する結果が出ている。Dudek (1975) は、創造性、IQ、アチーブメント・テストと適応的退行を示す指標との間に何の関係もなかったと報告している。Rogolsky (1968) は、3年生の子供にロ・テストを施行したが、芸術的創造性と適応的退行を示す指標との間に関係がなかったことを報告している。Wulach (1977) は、5～8才の子供を被験者とし、適応的退行と認知発達との間に有意な関連を見出した。Russ (1980) は、2年生の子供にロ・テストを施行し、適応的退行を示す指標と、学校の成績との間に相関を見出した。このような相反する結果の要因として考えられるのは、被験者とした子供の学年が違い、発達上の差が結果に影響を与えていること、用いたテストが各々違うことなどである。今後、子供に於ける適応的退行の問題を探っていく際には、適応的退行と発達の関係を考慮にいれて、すべての学年を含むようなより包括的な研究を行うことが望まれる。

以上のように様々な対象を被験者として、適応的退行の研究が成されてきたが、今後の課題として次のようなものが考えられる。まず、創造性と一次過程の量、一次過程に加えられるコントロールとの関係をより詳しく明らかにすることである。今までの異なった結果は、創造的であると判断する基準が各研究に於いて異なっていたことが、一番大きな理由であると考えられる。従って、テストを用いて創造性を測定する場合、そこで測定されている創造性（テストで測定される創造性はごく限られたものであるはずである）がどのような創造性なのかを明らかにして、その限定された創造性との関わりの中で結果を解釈すべきである。あるいはCohen (1960) の研究のように、ある専門家に創造性の判定をしてもらう時は、どのような基準で判定したかを明らかにして、その基準との関わりで結果を解釈すべきである。そうすれば、一見矛盾しているかに見える研究結果も、実は矛盾しているのではなく、創造性の様々な局面に、一次過程の量と一次過程へのコントロールが多様に関わっていることが明らかになるだろう。

その他に課題としては、質問紙によって測定されたRISEとロ・テストによって測定されたRISEの関係が、相関という観点からしか調べられていないので、両者の違いを明らかにすることが必要である。さらに、芸術家、非芸術家いずれの研究に於いても、Holtのコスリングシステムが複雑なため、数多くあるサブカテゴリーについての個々の検討があまり行われておらず、RISEの様相が細かい点で明らかにされていないことも、これからの研究の課題である。そして、創造性と適応的退行との関係をより詳しく調べるためには、テストを用いるだけでなく、一人一人の人間にアプローチする事例研究的な方法が必要となってくるであろう。（博士後期過程）

注1) 各条件についてSchaferはもう少し詳しく述べている。1) 退行過程で統合できない衝動・感情・幻想に近付き過ぎたときに、適当な情緒信号 (affect signal) がそれを察知し、うまく防衛出来るようにする一連の体制がととのっていることが大事である。2) 退行することは、エゴ

とイドの境界が強くなることであり、これがないと、境界を一時的に無くしたり、ゆるめたりできない。3) この支配性があることで過去の幼児的状况にも自由に戻って主観的体験をすることができる。4) RISE の結果の産物は、他者と共有されるわけだし、自我と超自我によって判断され、調べられるが、その両方に母子関係は大きい影をおとす。他者への信頼感をもっていることによって、生み出されたものは他者に受け取って貰えるという感覚が生まれる。その感覚によって退行が可能となる。

文 献

- 馬場礼子・小此木啓吾 (1961) 自我機能の弾力性と適応性——ロールシャッハ・テストの精神分析的な研究 (その3) 精神分析研究 8, No.1, 8 ~ 19.
- 馬場礼子・小此木啓吾 (1962) いわゆる芸術家に於ける自我機能の〈創造性〉と〈適応性〉——ロールシャッハ・テストの精神分析的研究 (その4) 精神分析研究 Vol.9, No.2, 1 ~ 9
- Bellak, L., Hulvich, M. & Gediman, H. (1973) Ego function in schizophrenics, neurotics & normals. New York: Wiley.
- Cohen, I.H. (1961) An investigation of the relationship between adaptive regression, dogmatism, and creativity using the Rorschach and Dogmatism score (Doctoral dissertation, MSU, 1960). Dissertation Abstracts International, 21, 3522B - 3523B.
- Dudek, S.Z. (1968) Regression and creativity: A comparison of the Rorschach records of successful versus unsuccessful painters and writers. Journal of Nervous and Mental Disease, 147, 535 ~ 546
- Fitzgerald, E.T. (1966) Measurement of openness to experience: A study of regression in the service of the ego. Journal of Personality and Social Psychology, 4, 655 ~ 663.
- Freud, S. (1900) Traumdeutung. (高橋義孝訳 夢判断フロイト著作集 2 人文書院)
- Freud, S. (1914 ~ 17) Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. (高橋義孝訳 精神分析入門フロイト著作集 1 人文書院)
- Holt, R. (1956) Gauging primary process and secondary process in Rorschach responses. Journal of Projective Technique, 20, 14 ~ 25.
- Holt, R. & Havel, J. (1961) A method for assessing primary & secondary process in Rorschach. (In Ricker-sovsiankina, M.A. (Ed.), Rorschach Psychology, John Wiley & Sons Inc.)
- 井上和子 (1972) 心的機能の弾力性についてロールシャッハ研究 8, 57 ~ 69.
- 伊藤俊樹 (1990) 美術専攻学生の自我の在り方について——主として退行および自我境界の観点より 京都大学教育学研究科 平成1年度提出修士論文
- Kalsched, D.E. (1972) Adaptive regression and primary process and dream reports (Doctoral dissertation, Fordman, 1972). Dissertation Abstracts International, 33, 441B - 442B.
- 金山由美 (1986) 非現実的体験に関する研究——現実感を失うことの両価性——京都大学大学院教育学研究科 昭和61年度提出修士論文
- Kris, E. (1952) Psychoanalytic Exploration in Art. (馬場訳 芸術の精神分析的研究. 岩崎学術出版社 1976)
- Pine, F. & Holt, R. (1960) Creativity & primary process; A study of adaptive regression. Journal of Abnormal & Social Psychology, 61, 370 ~ 379.
- Rosegrant, J. (1980) Adaptive regression of two types. Journal of Personality Assessment, 6, 592 ~ 599.
- Rosegrant, J. (1987) A reconceptualization of adaptive regression. Journal of Psychoanalytic Psychology, 4 (2), 115 ~ 130.
- Russ, S. (1980) Primary process integration on the Rorschach and achievement in children. Journal of Personality Assessment, 44 (4) 338 ~ 344.
- 斎藤稔正 (1981) 変性意識状態に関する研究 松籟社

伊藤：「自我のための退行」と創造性・適応との関わりについて

- Schafer, R. (1954) *Psychoanalytic interpretation in Rorschach Testing: Theory & application*. Grune & Stratton.
- Schafer, R. (1958) *Regression in the service of the ego: The Relevance of a psychoanalytic concept for personality assessment*. (In Lindzey, S.G. (ed) *Assessment of Human Motive*, Rinehart).
- Wild, C. (1965) *Creativity and adaptive regression*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 161 ~ 169.

(博士後期課程)